嵐山の森のこれからに向けて

嵐山再生研究会

今、嵐山の森林は大きな変化の途上にあります。そこで、嵐山の森を取り巻く様々な問題に対応するため、平成21年度より地元と行政・学識経験者による「嵐山国有林の取扱いに関する意見交換会」（主催：京都大阪森林管理事務所）が始まりました。また、平成22年度からは嵐山再生研究会が中心となり、市民参加による森林調査事業を実施してきました。

このパンフレットでは、これらの取り組みについて紹介するとともに、嵐山がどのように変わってきたのか、そして、将来に向けてどのような方向が求められているのかを紹介したいと思います。

「嵐山再生研究会」は、危機的な状況に置かれている嵐山国有林の再生に向けて、学術的観点から調査を実施して、必要な対策を提言することを目的とする、研究者の集まりです。（代表：深町加津枝京都大学准教授）

嵐山国有林で起きていることを調べる

歴史的・文化的な森林景観の変遷

嵐山は、かつてはアカマツとヤマザクラが主要な樹種でしたが、管理の変化やマツ枯れ被害の拡大などにより景観が変化してきました。そのため歴史や文化の中で愛でられてきた風景が見られなくなりつつあります。

1938 年の嵐山

現在の嵐山

かつて上流部で楽しまれた風景

野生生物との共存

次世代を担う樹木が生育できるよう、ニホンジカによる林内の利用状況や樹木への影響、防護柵の効果を調べています。

シカによる芽生えや苗、枝葉の採食

柵を設置して植物の生育を確保

安全な森のための基盤形成

落石や土壌流出を引き起こす暗くて危険な裸地斜面が増えているため、治山事業を通じて明るく若い森を育てる方法を調べています。

落石や土壌流出の様子を調べています

草や低木が失われた暗い斜面

若い草木が育つ明るい斜面へ

市民参加による森林調査事業

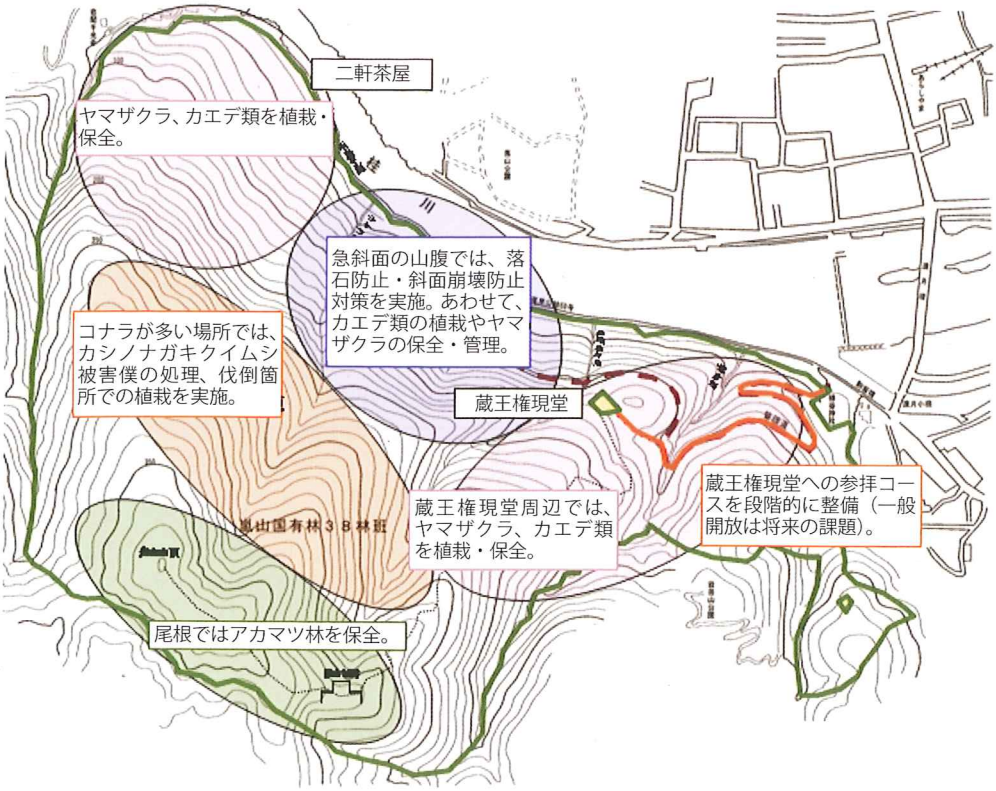
治山・獣害（シカの成育と影響）・景観という三つのテーマで、計４回の参加型モニタリング調査を毎回 20 ～ 30 名の地元からの参加で行いました。2010 年 11 月 5 日、2011 年 1 月 18 日、3 月 18 日と嵐山国有林内に入り、シカの影響や治山対策の現状を、また 4 月 19 日は渡月橋から大堰川左岸を通り亀山公園展望台へのルートで、嵐山国有林内での整備が外からどのように見えるのかを確認しました。モニタリングとは継続観察であり、実際この森林を継続的に考えていくことの必要性を感じ、今後５年、10 年、100 年と「嵐山をどのような森にしたいか」を、京都大阪森林管理事務所や学識者らと共に、我々地元民が中心になって継続的な事業として進めていく必要があることを認識できました。嵐山の自然は、何もしないことで維持されるものではなく、短期・中期・長期ビジョンを持って手入れをし、ときには作り出していくことが必要です。そのために、どんな山、森林にしたいか「夢」を持って考えていきたいと思います。

第２回の調査の様子

第４回の調査の様子

管理者（林野庁　京都大阪森林管理事務所）による森林整備

「嵐山国有林の今後の取扱方針」イメージ図



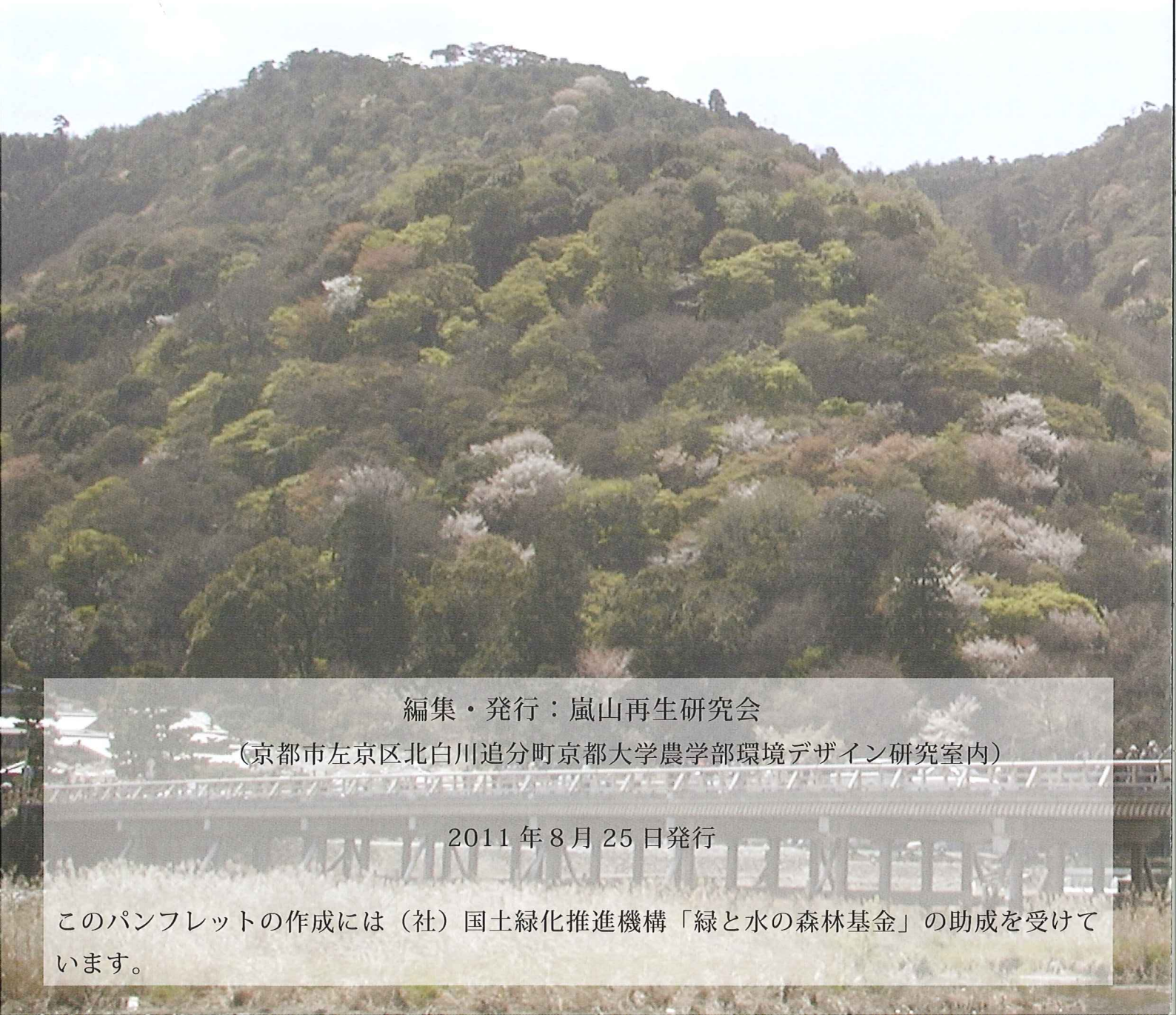
天龍寺の寺領であった嵐山は明治４年（1871 年）「社寺上知令」により官有地へ編入され国有林となりました。国有林野事業では地元関係者、学識経験者などの意見を聞きながら、森林の荒廃防止や景観変化への対応など、将来に向けて嵐山を整備していきます。

地元中学生の参加による植樹

嵐山のこれから

大本山天龍寺　宗務総長　　栂承昭

マツ枯れ、ナラ枯れなどにより、山紫水明の嵐山は危機に瀕しています。戦後のエネルギー革命によって、下刈りをしたり薪を伐って火を焚いたりすることがなくなったため、山に人が入らなくなり、そうすると山が荒れてきます。さらに人が入らなくなったことでシカやサルなども繁殖してきます。毎年、保勝会で植樹をしていますが、それらの獣害で効果が出ていないということもあるのです。この一帯の自然、景観を守り、保全するには川と山を守っていかなければなりません。いつもそのことを念頭に考え、地域の人間からいろんな知恵を出し合ってはじめて山紫水明の嵐山を守ることができるのではないでしょうか。山も川も一体として考え、様々な提起をし、調査をして、一日でも早く美しい嵐山を取り戻し、観光で来られたお客様にも気持ちのよい山だな、気持ちのよい川だな、よい嵐山だったと印象をもって帰ってもらえる場所にしなければなりません。



編集・発行：嵐山再生研究会
（京都市左京区北白川追分町京都大学農学部環境デザイン研究室内）

2011年8月25日発行

このパンフレットの作成には（社）国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」の助成を受けています。